緑ケ丘公民館開館50周年記念

MIDORIGAOKA KOUMINKAN 50th Anniversary

キャッチフレーズ

笑い声 集う人の和 緑ケ丘

令和3年度（2021年度）

あいさつ

緑ケ丘公民館は令和3年4月1日、記念すべき開館 50 周年を迎えることができました。これもひとえに、公民館地区館長や自治会長を始め、緑ケ丘地区の役員の皆様や関係者の方々の御理解と御協力の賜物であると、心からお礼申し上げます。

昭和46年に産声を上げた緑ケ丘公民館は、50年もの長きにわたり地域の皆様と共に歩み続けてきました。社会教育や地域コミュニティの拠点として親しまれ、今や地域に無くてはならない存在になったものと確信しております。

この50年の間、少子高齢化の進展や人口減少社会の到来など、私たちを取り巻く環境は大きく変化しました。その変化に伴い、公民館に対するニーズは多様化し、担う役割も年々重要になってきております。今後も、地域の方々の声や時代に即応しながら、公民館として何ができるかを常に考え、地域の核施設として成長を続けてまいります。

開館50年の節目にあたる令和3年4月1日は、第10次厚木市総合計画のスタートの日でもあります。新しい総合計画では、緑ケ丘地区の目指す姿として「住民のふれあいや絆を深め、自然と調和する笑顔とあいさつがあふれるまち」が掲げられています。この姿を実現するためにも、公民館事業などを通じて、これまで築いてきた地域の皆様との絆をより一層深め、緑ケ丘地区の団結力を更に強いものにしてまいりましょう。皆様には変わらぬお力添えをお願い申し上げます。

結びに、地域の皆様の御健勝、そして緑ケ丘地区のますますの御発展を祈念いたしまして、お祝いのあいさつといたします。

厚木市長　小林常良

あいさつ

緑ケ丘公民館が、開館50周年を迎えました。

地域の皆様方には、公民館を児童から成人、高齢者までの総ての年代の方々が学習、研修、スポーツを始め、趣味のサークル活動を楽しむ場として、更には、集い、語らい、情報交換の場として御活用いただいておりますことを、大変喜ばしいことと思っております。

特に、緑ケ丘公民館では、3世代がふれあう交流の機会として、音楽を通じ、国内でもトップクラスの高度な文化に親しむ事業が展開され、共に歌い、同じ時間を共有されていることは、他の地区の目標ともなっております。

ふるさと祭りは、地域全体のお祭りとして、近隣地区からの参加者も年々増えております。

このような活動、取組が評価され、令和3年2月には、全国優良公民館として文部科学大臣から表彰されましたことは、50周年に花を添えるものでありました。

今後も、郷土の歴史や文化などを人と人、次世代に「つなぐ」、個性や特徴を「伸ばす」教育を推進し、未来を担う人づくりを実現してまいりますので、皆様方のお力添えと御協力をお願いいたします。

厚木市教育委員会
教育長　佐後 佳親

あいさつ

昨年の神奈川県公民館協会の受賞に続き、今年2月には文部科学大臣から優良公民館表彰を受け、4月には、緑ケ丘公民館開館50周年を迎えることができました。

これもひとえに、公民館運営に携わってくださる地区自治会、各委員会、団体等及び地域の皆様や公民館をご利用される皆様が、支え、愛し、育ててくださった賜物と心から感謝を申し上げます。

さて、2年ほど前に公民館開館50周年に向かって、記念事業を心新たにして取りかかった矢先の昨年初めごろから新型コロナウイルス感染症が流行し始め、瞬く間に全国に広がったことはご存知のとおりです。これに対し、政府は全校休校の要請や全国民に布マスクを2枚配布、10万円の特別定額給付金、経済活性化と観光関連支援のためのGoToトラベル等の施策、前後して感染防止対策のための緊急事態宣言やまん延防止措置を発して、マスク着用、3密(密閉・密接・密集) を避けるなどの新しい生活形態の導入、飲食業は午後8時までの営業や酒類の提供禁止、県域を越えての不要不急の外出を控える、大規模イベントの中止や人数制限等々の対策も実施されました。更には、第 32 回オリンピック競技大会 (2020/ 東京)・東京パラリンピック競技大会も原則無観客となりました。

そのようなことから、止む無く公民館の閉館 (一部利用不可) やマスク着用、手指の消毒、換気等をおこない不自由で限定的なご利用にととどまり、地域最大のふるさと祭りを始め、スポーツ大会や学級講座等はほとんどが中止、私たちは公民館としてできない理由を探すのではなく、どうしたら、どんなことができるのか、ともがいてきた2年間でした。

しかし、「安心安全」ー幸せ、財産・物、生命を守るー このことは、命あっての何とかと言いますが、「命を守ること！を総てに優先して行動する」を判断の基準におくことと考えると、事業の中止や公民館閉館等の措置をしなければならなかったこと…、悔しい限りです。

結びに、一日も早く、笑顔あふれる地域や楽しい公民館の再来と皆様方のご健勝とご発展をお祈りし、併せて、今後とも一層のご支援、ご協力をお願い申し上げる次第であります。

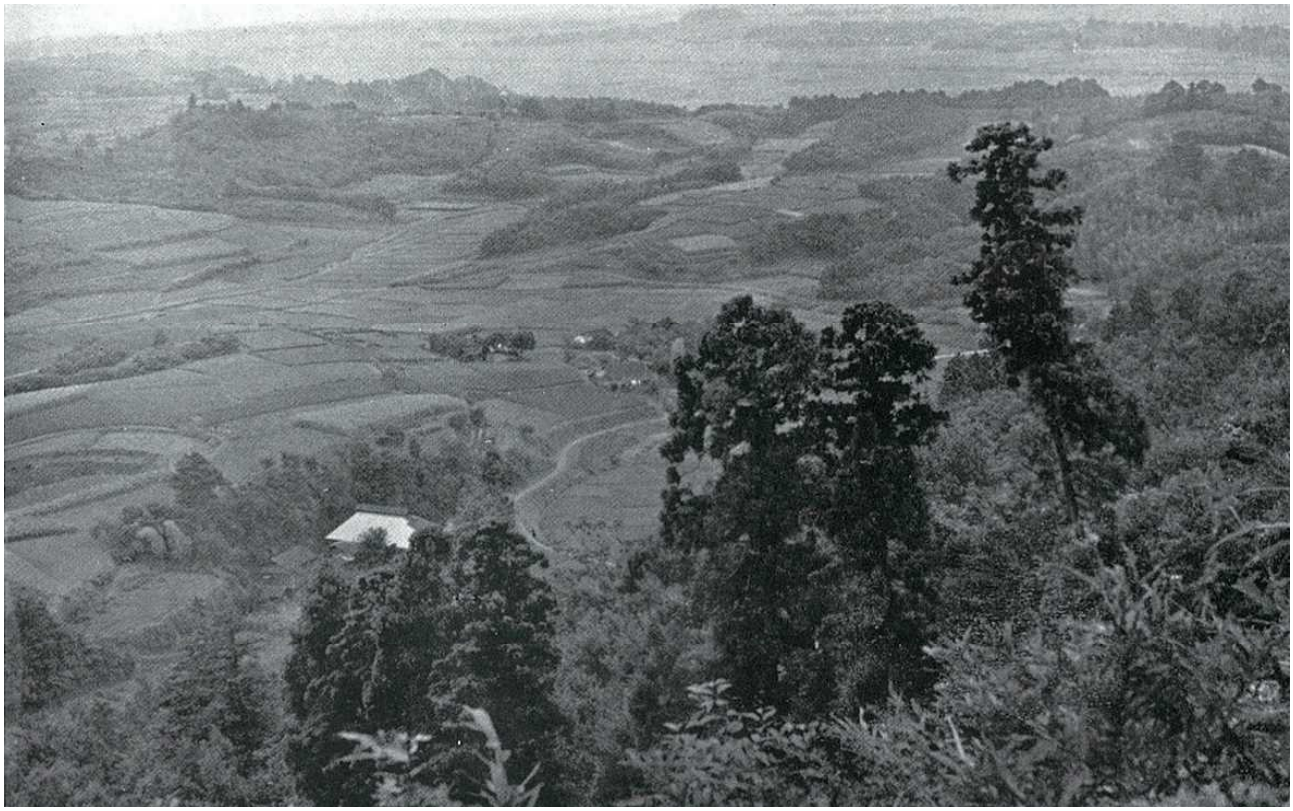
緑ケ丘公民館
地区館長　佐々木 安雄

目　次

1	厚木市長あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	厚木市教育長あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・	2
3	厚木市立緑ケ丘公民館地区館長あいさつ・・・・・	3
4	緑ケ丘今昔 ～緑ケ丘タイムマシン～・・・・・・・・	5 ～ 11
5	座談会 ～緑ケ丘よもやま話～・・・・・・・・・・・	12 ～ 15
6	古代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	16
7	中世・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17 ～ 20
8	近代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21 ～ 22
9	緑ケ丘の開発・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	23 ～ 26
10	バスの乗入れについて・・・・・・・・・・・・・・・	27 ～ 28
11	電話加入について・・・・・・・・・・・・・・・・・	29 ～ 30
12	緑ケ丘地区自治会のおこり・・・・・・・・・・・・	31 ～ 32
13	緑ケ丘地区にまつわる唄・・・・・・・・・・・・・	33 ～ 38
14	緑ケ丘地区にまつわる昔話・・・・・・・・・・・・	39 ～ 42
15	緑ケ丘地区年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・	43 ～ 53
16	厚木市の公民館の生いたち・・・・・・・・・・・・	54
17	歴代緑丘公民館地区館長・・・・・・・・・・・・・	54
18	50周年記念事業実行委員会 名簿・・・・・・・・・	55
19	編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	56

玄関談話

緑ケ丘今昔 ～緑ケ丘タイムマシン～



昭和30年代　高松山 ⇒ 尼寺原

昭和40年代　中程の造成中は厚木東高等学校用地

昭和42年ごろ　　写真提供：神奈川県住宅供給公社

平成26年　　写真提供：緑ケ丘2丁目自治会

昭和37年　尼寺原線開通　料金10円

昭和43年ごろ 林王子遺跡発掘調査 厚木市史 原始編

昭和44年ごろ　緑ケ丘児童館

昭和40年代　林大泉坂

令和３年　直進王子2丁目　左　福伝寺に至る

昭和30年代　王子神社入口

令和３年

昭和37年ごろ　尼寺原工業団地造成

令和３年

昭和40年ごろ　緑ケ丘４丁目 ⇒ 西方面

令和３年　緑ケ丘4丁目　緑ケ丘まる公園南側

昭和40年ごろ　緑ケ丘5丁目のえのき

令和３年

昭和40年ごろ　緑ケ丘3丁目 ⇒ 大山

令和３年

昭和40年ごろ 緑ケ丘3丁目 ⇒ 大山 後ろは奥原地区

令和３年

昭和38年ごろ　戸室5丁目 ⇒ 大山

令和３年

昭和38年ごろ　緑ケ丘2丁目公民館・小学校 ⇒ 大山

令和３年　中央・緑ケ丘公民館

昭和38年ごろ　戸室5丁目パチンコ店 ⇒ 緑ケ丘1丁目

令和３年

昭和38年ごろ　緑ケ丘2丁目 ⇒ 緑ケ丘1丁目

令和３年

昭和39年ごろ　緑ケ丘4丁目 ⇒ 大山

昭和39年ごろ　奥原地区 ⇒ (株)武部鉄工所

昭和35 年ごろ　アンリツ(株) ⇒ 大山

昭和35年ごろ　アンリツ地鎮祭 テント内左 石井忠重厚木市長

昭和40年ごろ　緑ケ丘中央商店街

昭和64年ごろ

平成18年ごろ

昭和43年ごろ　緑ケ丘2丁目 ⇒ 芝公園
ヒマラヤ杉は幼木

座談会　～緑ケ丘よもやま話～

緑ケ丘地区は、昭和37年ごろから開発が進み、緑ケ丘公民館は、昭和46年4月1日に開館し、令和3年に50周年を迎えました。

緑ケ丘公民館開館50周年記念事業の一環として、当時を知る方々にお集まりいただき、昔話やこれからの緑ケ丘地区に期待されることなどをお聞きしました。

集合写真

令和3年7月15日(木)　9:00～12:15
緑ケ丘公民館　会議室
出席者(前列中央から時計回り)

徳間 和男	元 厚木市議会 議長・緑ケ丘公民館 顧問
笹山 惠一郎	緑ケ丘地区自治会連絡協議会 会長
竹内 正徳	緑ケ丘公民館開館50周年記念事業実行委員会 記念誌発行部会長
飛鳥井 光治	南毛利公民館 地区館長・初代緑ケ丘公民館主事
三田 粂吉	元 厚木市商店会連合会 副会長
佐々木 安雄	緑ケ丘公民館開館50周年記念事業 実行委員長 緑ケ丘公民館 地区館長

司会(事務局)　戸井田 和彦 緑ケ丘公民館 館長
(以下、敬称略)

司　会　皆さんは、いつ頃、緑ケ丘にきましたか。
牛乳16円、かけそば40円、銭湯23円、映画館300円という時代です。

飛鳥井氏

徳間氏

飛鳥井　徳間さんは、緑ケ丘1丁目が完成する前に、来たでしょう。
徳　間　そうだね、昭和38年かな。3月に1丁目から3丁目の一部を、第1次分譲が始まった。ちょうど売り出していた。自分の土地は、坪5,500円だったな。

三　田　僕は、 昭和37年の11月に来ました。アンリツや厚木自動車部品ができて、社員の住宅が必要となった。緑ケ丘方面は、道路が細くて、バスは入ってこれなかったね。

飛鳥井　尼寺原の工業団地は、厚木市の工場誘致条例が施行され、多くの企業が進出したことで、緑ケ丘地区は、昭和38年に勤住一体型、厚木市初の勤住型大規模ニュータウンが誕生した。

佐々木　そういえば、王子1丁目は理想的な住宅地ですが、この公園に土地区画整理事業完成記念碑が建立されていて、「…従前は、若干農地があったほかは大部分雑木林の丘陵地であった。昭和三十年代より周囲の開発が急速に進み、緑ケ丘住宅団地を始め、文化施設が次ぎ次ぎに建設されるに及んで、この地を高級住宅地として利用価値を高めることを目的として…」とありますね。

司　会　緑ケ丘を選んだ理由は、何ですか。小田急線で本厚木・新宿間が１時間３０分、相鉄線で横浜まで50分でした。本厚木駅までは2.5㎞、国道246号線まで1㎞、県道清川ー厚木線まで 200mの地の利です。

笹　山　やっぱり、大規模ニュータウンというのは、夢があったよね。

竹　内　王子は、昭和50年ごろだったけど、新聞に１期、２期の募集がでました。建売りで、1,500万円ほどだったよ。

司　会　当初の緑ケ丘の様子は、どうですか。

徳　間　何にも無かったな。今の県営住宅の辺りは、一面の桑畑だった。

笹　山　本厚木駅まで、バス代は20円だったかな。当時は、下の林バス停に行くか、厚木自動車部品前まで行かないとバスに乗れなかった。特定郵便局ができたり、横浜銀行の緑ケ丘出張所が商店街にできた。県営住宅の家賃振込は、横浜銀行が指定されていたんだ。

三田氏

三　田　今の公民館の場所が空き地で、八百屋さんが、そこでお店を開いてた。その後、八百屋さんは徳間さんの調剤薬局の隣に来たんだ。

飛鳥井　緑ケ丘小学校は、当初は、南毛利小学校緑ケ丘分校として建設が進められ、緑ケ丘という住居表示が決まった 41 年 4 月に開校したと思います。それと、厚木市で初めて、緑ケ丘と南毛利小学校間で30人ほどの児童を乗せたスクールバスが運行された事は、記録に残されていますね。
緑ケ丘に公民館ができたいきさつをご存知ですか。

徳　間　八百屋さんが店を出していた空き地の活用を相談されて、私が公民館を提案したんだ。

飛鳥井　そうですか。私が公民館主事として昭和46年4月に着任したときは、公民館の建物はなく、児童館の看板と一緒に公民館の看板も掛けてあった。児童館を間借りして開館したんですよ。だから、事務室はなく、児童館の入口右側に、8畳ぐらいのプレハブを建て、事務を執っていた。職員は、私一人だったので、いつも「留守にします」という札を出して地区内を飛び回っていたのを思い出します。
ところで、電話を引かれたのは徳間さんのところが早かったですよね。

徳　間　そうそう。尼寺ファーマシーの店名で薬局をやってましたので、赤電話を置かせてもらいました。他に、イリクストア前に公衆電話、あと、住宅公社の事務所、緑ケ丘ではこの３台しかなかったと思う。

飛鳥井　昔、電話を引くためには、債権が必要だった。７万円ぐらいしたかな。

笹　山　債権は、高かったんだよ。局番の221は、初期のころの局番で、電話番号を見ると「あぁ、最初のころに来た人だな」ってわかるんだ。

司　会　地域との絆、思い出にのこることは何ですか。

飛鳥井　自治会のことですが、当時は区長会と言っていたんですよね。区長は、市の職員扱いで、市長から委嘱を受けていたんですよ。緑ケ丘区長会は、各丁目とも専門部会を設けるなどで、全地区からモデル組織として注目をあび、他地区の区長から運営について多くの問合せがあったのを覚えています。

徳　間　戸室に住む安藤さんには、いろいろとご尽力をいただいた。

飛鳥井　緑ケ丘音頭の制作も楽しかったですね。

徳　間　そうだね、いろいろな人材が揃っていた。作詞は４丁目の佐藤邦男さん、歌は2丁目の脚本家で、元歌手のジェームス三木さん、合唱は西迫玲子さんを始めとする緑ケ丘コールナナリイ、そして録音は東芝電子音響に勤めていた大沼優さんなど。

飛鳥井　そうでしたね。レコードを録音したのは、昭和 46 年 6 月 27 日 (日)、緑ケ丘小学校の音楽室で、和太鼓、ギターなどもそれぞれが持ち寄り、音響器材の伴奏に合わせて、コーラスと手拍子が教室いっぱいに響いていたのを思い出します。

当日は、ちようど参議院選挙の投票日で、録音中に「投票に行きましょう」と広報車の声が入っちゃって、何回かやり直しました。結局、4 時間ぐらいかかって、大変だった。

1,000 枚作って 1 枚 200 円で販売しました。

その後、林にお住まいの厚木婦人会の南ヨシエさんに振付けをしてもらい、その年の8月12日、緑ケ丘団地祭りの盆おどりで発表会が開かれたのを今のように覚えています。

他にも、文化人では、作家の森村誠一さんがいましたよね。

笹山氏

笹　山　奥様が、自治会活動なんかに参加してくれてたな。

飛鳥井　スポーツでは、前館長の古長重幸さんが、卓球の振興に尽力されました。特に、ママさん卓球は、緑ケ丘公民館でお母さん方を集めて、卓球教室を週2回開いたのが、厚木市ママさん卓球協会につながったのですよ。まさに、協会の生みの親ですね。地域文化のまつり・イベントでは、緑ケ丘3丁目の盆おどりが団地祭りとなり、その後、歩行者天国のふるさとまつりに発展しました。

佐々木　緑ケ丘小学校前バス停西側に、ストアーと公社の長屋づくりの12軒のテナントが入っていていました。やがて、閉店が相次いでいたことで、平成 25 年秋口に、解体することの情報を得ましたので、その年の11月26日の市長とのフリートークで、緑ケ丘中心地のにぎわいと復興をお願いしたところ、市はすぐに公社へ①地域の核、②地域行事の場、③良好な住環境保全で、真ん中に駐車場があり、伝統のふるさとまつりにも協力いただける店舗づくりを要望してくださって、現在のような明るい一画となりました。

三　田　平成 2 年には、王子地区へのバス新設路線も実現しました

徳　間　皆で、いろいろと苦労したね。。

司　会　これからのまちづくり、人づくりに期待することは、何ですか。

笹　山　緑ケ丘 2 丁目には、公園がない。気軽に人が集まって交流ができ、コミュニティが広がり、災害時には一時避難所や災害ごみの集積所になるような公園が必要です。

三　田　私たちの出身地は、全国様々です。でも、子どもの世代は、緑ケ丘がふるさとです。緑ケ丘を出た方が、緑ケ丘を誇れるか、それを創るのが大切だと思う。そういう意味合いもあって、ふるさとまつりを頑張ってやってきましたね。

竹内氏

佐々木氏

竹　内　親、子、孫の３世代がコミュニケーションを持つことが、緑ケ丘の発展につながると思う。

司　会　最後に、地区館長として、総括をお願いします。

佐々木　小さなコミュニティから隣、近所など、外側に広げた絆が、やがて地域のコミュニティを形成します。そこに、新たな「まち」の形が生れてくるのだと思います。今日、お集まりの皆さんは、この緑ケ丘地区を一から築き上げてこられた。この情熱を、次の世代、そのまた次の世代へ継承して、「ふるさと緑ケ丘」を、ぜひ、発展させていただきたいと思っています。
本日は、ありがとうございました。

[古 代]

昭和43年ごろ　林王子遺跡発掘調査
厚木市史 原始編

私たちの暮らす緑ケ丘地区は、相模川の支流の小鮎川右岸に位置し、沖積地がひらけ、ローム層が堆積しています。

今から数万年前に、相模川と支流が大山・丹沢山地から土砂礫を削り取り、相模湾に堆積したものが隆起しました。

同じころ、箱根や富士山の火山活動が活発化し、火山灰等が堆積してローム層となり、尼寺原台地となりました。

緑ケ丘地区は、縄文時代から集落が形成された林王子遺跡を始め、周辺には登山古墳群、古松古墳群、上天神古墳などがあり、尼寺原台地には、古くから人々が集い、語らい、協働で暮らしてきました。

昭和30年2月1日に厚木市制が施行されると、尼寺原工業団地に企業が誘致されました。昭和37年には、勤住地域として尼寺原団地が開発、昭和40年4月1日に「緑ケ丘」と住居表示がされ、皆様の思いは令和の時代になっても綿々と受け継がれ、令和3年4月では、人口約4,600人、2,100世帯を数えるほどになりました。

林王子遺跡

縄文時代中期を主体とする集落遺跡（現：王子2丁目）です。尼寺原の北東端の台地にあり、標高は約70メートル、遺跡の南東部に王子神社が鎮座し、県水道配水池工事で墳裾を削られた円墳が1基あります。

尼寺原の平坦な台面は、早くから開墾され、付近一帯の畑からは、土器、石斧、石鏃などが多数発見されており、古くから遺跡自体の存在が知られていました。

林王子遺跡の有孔鍔付土器
H21年2月厚木市指定有形文化財
※大英博物館展示歴あり

宅地開発に伴い、昭和43年夏の予備調査では、住居跡8軒、石組炉などが発掘され、昭和47年の7か月に及ぶ本調査では、人体装飾付き有孔鍔付土器（ゆうこうつばつきどき）が出土されました。

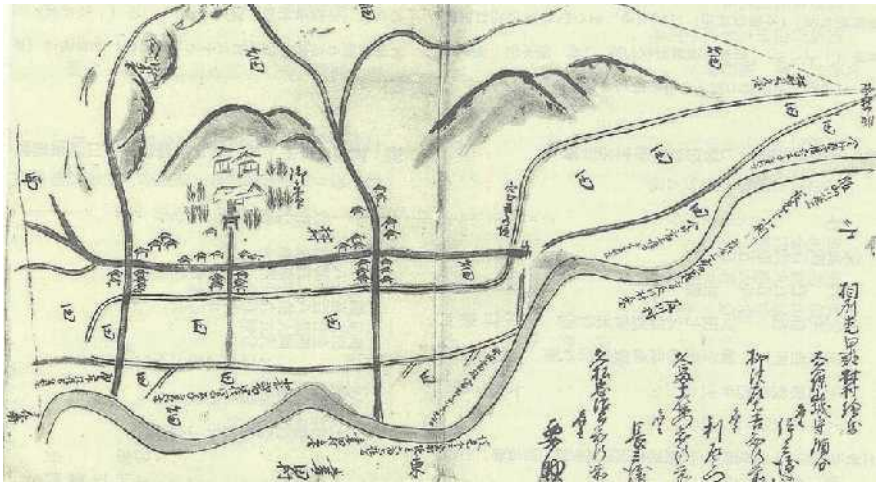
現在、県水道配水池の横に円墳が1基あり、かつては古墳群が形成され、調査区域からも3基の円墳の周溝が発見されました。縄文、弥生、古墳時代と、継続期間が長かったことがうかがわれます。

（厚木市史　地形地質編　原始編　抜粋・要約）
（昭和60年11月発行「緑ケ丘のあゆみ」抜粋・要約）

[中 世]

現在の緑ケ丘地区は、睦合西地区林の一部、小鮎地区飯山の一部、南毛利地区温水の一部から構成されています。

中世期は、入会の秣場（まぐさば）として飼料を育てていたり、江戸時代には、林村に捉飼場（とりかえば・鷹の訓練所）の杭が、現在の林丁字路付近にあったことから、幕府の鷹狩練習場の一部ともなっていました。



寛政８年（1795年）図　　厚木市史　村落2

王子神社

王子神社

「王子権現社、社地に弘安四年辛巳三月日相模守平時頼と刻す。今年は時頼卒後一八年に当たれり、是も後人の贋造なり」。新編相模国風土記稿はこのように記されています。

王子稲荷は、当時、福伝寺持ちとあり、この権現社の古碑のことと同一の記載がされています。それは、両社が字王子にあり、天保期(1830 ～ 1843) にはここにあったことになります。

しかし、厚木市文化調査団では、「相模守平時頼」と後人が刻み加えたもので、平時頼が王子権現を勧請したとの伝説を信じた人が書き入れたようだとしています。

明治27年2月10日の神社明細取調書では、本社を距る南の方四町二五間鳥井戸と称する地に、鳥居の基礎両個あり(中略)この辺一帯尼寺原とて(中略)古時尼僧住し七堂伽藍ありしと伝ふると以てみれば、本社も当時の規模蓋し観るべきものありしならんか」とあります。

「天保一二年王子両社焼失修復成就、弘化三年九月王子社焼失、弘化四年二月再建」と観化簿にあって、同年4月8日遷宮となりました。

昭和11年10月の記録簿によりますと「建長年間に北条時頼が王子権現、王子稲荷の両社を戌亥除けとしてここに建立した」と旧記にあるとされています。

福伝寺には、弘安四年三月建立の古碑と王子権現の御神体が保存してあるとされています。

また、昭和11年10月21日社殿再建と石の鳥居を立てたとなっています。祭典は、4月3日、社殿には径10センチメートル弱のやや楕円形黒石と文政一〇年の棟札が納められています。

文献では、弘安の古碑に関心が寄せられてはいますが、東京に郷社王子神社があり、この郷社は、元享年中、紀州の熊野神社を分霊遷座したものといわれています。

王子権現も、どこから何時の頃にか分霊したものではないかと考えられます。

厚木市史資料集 (1)・緑ケ丘のあゆみ (抜粋・要約)

王子神社鳥居の礎石

緑ケ丘公民館北東の角に、平成20年2月に厚木市が建てた「王子神社鳥居の礎石」の碑があり、「緑ケ丘小学校校庭付近に、王子神社への参道入口があった。畑の耕地整理のため穴を掘ったところ、細かい玉石とともに平らに敷かれた二つの石が出てきた。王子神社の真正面を向いていたので、鳥居の礎石と思われる。この辺りは、古地図に鳥井戸と記されている。」とあります。

王子神社 鳥居の礎石

以前は、緑ケ丘小学校入口バス停付近に置かれていましたが、スーパーマーケット等を解体する際に、緑ケ丘公民館の敷地内に、史跡として移設したものです。

かつて、地域住民の方の依頼で、当時の厚木市文化財保護調査員をしておられた井上肇氏が、調査、報告をされました。

1 調査対象と趣旨

(1) 厚木市緑ケ丘2丁目1番、スーパーマーケット前にある2個の石が調査対象

(2) この2個の石がどこから持ち込まれたのか出所が不明であるから、石の由来を調査

2 調査結果 (石の由来)

(1) この石は王子神社 (俗に王子権現社) の鳥居の礎石である。

(2) その証拠は、明治27年2月10日神社明細取調書に次の如く記録されている。

「祭神予母津事解男命（よもつことさかのおのみこと）、伊弉冊命（いざなみのみこと）、速玉男命（はやたまおのみこと）、勧請不詳、弘安四年巳祀三月吉堅固山福伝寺と記する棟札あり、然らば此の年を以て再建となすべし。但し本社を距る南の方四町二五間鳥井戸と称する地に、鳥居の基礎両個あり」と。

※ 四町二五間 ⇒ 約481メートル

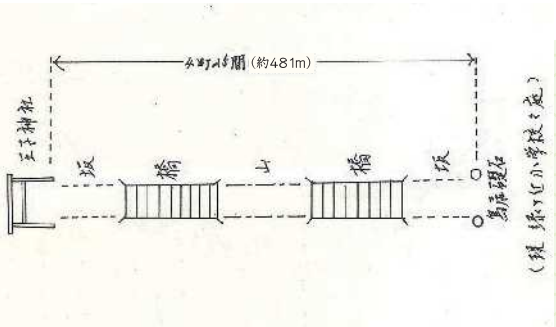
以上の如く、この石が、「鳥居の礎石」としての石であることが確かである。

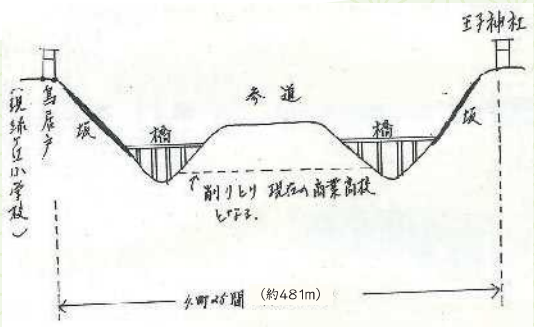
(3) 昭和 39 年ごろ、厚木市緑ケ丘団地が創建される頃、この石が所在した土地の所有者は、厚木市林 22 にお住いの川瀬昇氏であった。

(4) 川瀬氏の話によれば、緑ケ丘団地が創建される以前、年代は不詳であるが耕作の都合上、地中にあったこの石を掘り出し、畑の端においたとの事であった。

(5) 石を掘り出す際、この石は、2個の間隔が約数メートル離れており、王子権現の真正面に向かっていたので鳥居の礎石であることを認識したとの事である。2個の礎石の他に多数の玉石が出て来たそうである。

(6) 緑ケ丘団地創建のため、川瀬氏は、土地を売却したので、その後、この石や土地の処理は全く関係しないから、どのようにして、この石がスーパーマーケット前に置かれるようなったか、その由来については、ご存知ないとの事である。





福伝寺

王子にある福伝寺は、曹洞宗の長生寺の末寺で、開山は白鳳宗淑によって寛永14年(1637年)に建立されました。

元来この地は、笠間六郎の居城跡で、真言宗善福寺という七堂伽藍の寺があって、王子権現、王子稲荷両社の別当(管理、管轄の意)寺でありました。

福伝寺　撮影協力:福伝寺

この善福寺は、天文期(1532～1555年)に兵火によって焼失し、その後、67年を経て、林山竹翁和尚が草庵で教えを説いていた折に、長生寺11世の白鳳宗淑大和尚が来地してこの地に開山したといわれています。寺に対して、慶安2年(1649年)には、寺領19石2斗の御朱印を賜っています。

現在の伽藍は、安永期(1772～1780年)に15世祖参和尚が改築し、一部新築を加えています。

大正12年(1923年)には、関東大震災で大きな被害を受けましたが、次年には改修がされました。その後、昭和12年(1937年)には、参道や庫裡の改修を行っています。また、昭和21年(1946年)2月24日には、当時の疎開学童の失火で焼失しましたが、御本尊様と山門は焼失を免れました。

その後、寺有地が県立厚木東高等学校の用地になるとともに、本堂が再建され、27世長道令宣は、本寺から再中興の称号を受けました。

現在は、本堂、庫裡、山門(旧荻野山中陣屋の裏門を移設)が敷地内にあり、御本尊様は、釈迦三蔵尊、地蔵菩薩座像、道元禅師像、千手観音立像、十一面観音像、阿弥陀如来像などが安置されています。なお、寺内にある板碑は、市内に現存する最古のもので、弘安4年(1281年)頃のものと考えられています。

厚木市史資料集(1)・緑ケ丘のあゆみ(抜粋・要約)

また、福伝寺に隣接して県立文郷山団地があり、文郷山の「文」は「梵(僧侶の意)」で、僧侶の郷(むら)という意味があります。

緑ケ丘地区の生い立ち(抜粋・要約)

弘安4年の板碑　撮影協力:福伝寺

緑ケ丘5丁目の榎(えのき)ー緑ケ丘5丁目6付近

緑ケ丘4丁目との境の緑ケ丘5丁目側、駐車場の敷地内に、榎があります。大山参詣の脇往還や産業用道路として、林から愛名にかけて尼寺原を横断する愛名海道が作られました。この道路の目印として、榎が何本か植えられたそうです。

平成17年5月ごろ、枯れてしまいましたが、同年11月に植え替えられた榎が現在のものです。

榎は、成長が早く、果樹は甘く、夏場は葉が多く茂るので木陰を作り休憩場所ともなるので、江戸時代には一里塚や街道の目印としても活用されました。

また、御神木としても多くの神社で植栽されています。

一部、厚木の古木(抜粋・要約)

昭和40年ごろ　榎　　写真提供:嶋悦子様

平成18年　榎

令和3年

[近 代]

厚木は、江戸時代元禄のころ (250年以上前) 相模の小江戸と呼ばれ、中心部はにぎわいを極めていたといわれています。近郊ばかりではなく八王子などの北部方面の薪炭、織物などは水運によって須賀港 (平塚市) を経て、小田原、江戸方面などまで運ばれ、帰りには塩、乾魚、肥料などの生活必需品が厚木に陸揚げされ、貨物の集積地となっていました。

その後、 明治元年 (1868年) 明治維新、 明治4年(1871年) には廃藩置県を経て、明治11年郡区町村編成法、明治20年 (1887年) になると相模川の下流・馬入川 (平塚市) に東海道本線の鉄橋がかけられ、相模川の水運は半減したとされます。

合併時の図

一方、明治 22 年に市町村制が施行され、1町24村が合併して新しい形の1町7村ができました。その時の町村名が、合併市制施行後も、現在の地区の名称として残されています。

南毛利村ー戸室村、恩名村、温水村、愛名村、愛甲村、船子村が合併

小鮎村ー飯山村、上古沢村、下古沢村が合併

依知村ー金田村、下依知村、中依知村、関口村、山際村、上依知村、猿ヶ島村が合併

相川村ー大住郡長沼村、上落合村、下津古久村、戸田村、岡田村、酒井村が合併
玉川村ー岡津古久村、小野村、七沢村が合併
荻野村ー上荻野村、中荻野村、下荻野村が合併
厚木町ー単独で町制を実施
睦合村ー昭和21年に三田村、下川入村、棚沢村、妻田村、及川村、林村が合併

相模川の水運の減少、衰退が続いていた時期に、大正12年（1923年）に関東大震災が発生し決定的な打撃を与え、繁栄は崩れ去ったと記録にはあります。

大正12年9月1日　地震　正午の記録

大正 12 年9月～同 13 年1月
林村 成瀬家 地震記録（抄録）
右は 秋蚕（あきご）最中、日本国に有ざる 未曾有の震災にて、正午より震動し 同夜迄 数百回の振動続き、家はつぶれ、地はさけ、人心恐々とす、食事に困り、水に困り、僅（かなしみ：キン）も死するが如き有様なり　私宅の竹笹（たけやぶ）に 8家にて 6日間居たり、9月2日に外国人さわぎ、又は つなみ等の さわぎにて、大いに 人々動揺したり、男子は竹槍・日本刀・鉄砲を持ち 防止に努めたり、厚木町（現：厚木市街）は 八分火災、残りは全潰、厚木町より平塚迄は 皆其中（みなそのなか）は全潰 死傷多し、横浜市は全部火災、東京も八分火災なり

大正13年度　地震続き

本年の山は、寺谷（当時の林村のうち 現：厚木市王子）岸 久馬助の墓地の裏の山、壱畝（いっせ）は 12 年度に切る、他は全部切る
1月 15 日、午前5時半頃、突然 12 年9月1日の地震の如きなり、中郡戸田村・酒井村（両村ー現：厚木市 ）を中心に、東西は 同日の地震にて立てたる家を 又 全潰す、厚木町は 全潰・半潰にて 100 戸、海老名村（現：海老名市）は 半潰多し、又 雨戸・障子を折りたる者 又 多し、此の地震にて大正13年中に1月15日位の地震5回あるとの新聞にて、処に（庭か）バラックを作り、地震あるとの話を聞き バラックに寝たり
（林　成瀬家文書　厚木市教育委員会蔵）
厚木市史　近代編 (1)　現代字等に変換

その後、昭和16年（1941年）には、神中鉄道（後に小田急電鉄に統合）の開通もあり、新たな繁栄の時が到来しました。

この1町7村が、昭和30年から31年10月1日にかけて合併し市制を施行して現在の厚木市の原形となっています。
のちに「緑ケ丘」の名称になる尼寺原は、戸室村分と恩名村分を両村民が開墾し、入植者はなく「尼寺原新田」と呼ばれました。飯山村と温水村にかかる原野は、引続き、両村の秣場（まぐさば）として利用されました。

緑ケ丘の開発

昭和31年度の年次経済報告の結語では、『もはや「戦後」ではない。我々はいまや異なった事態に当面しようとしている。回復を通じての成長は終わった。今後の成長は近代化によって支えられる。そして近代化の進歩も速やかにしてかつ安定的な経済の成長によって初めて可能となる』とつづられています。

厚木市は、昭和30年2月1日、県下13番目の市として、人口4万人余り、相模川、中津川、小鮎川の三川合流地点にあり、また、県のほぼ中央に位置し、小田急線、相鉄線を利用し、新宿へは1時間30分、横浜へは50分でアクセスでき、将来の発展が約束された田園都市でした。

緑ケ丘の開発は、昭和36年に神奈川県住宅公社が計画をしました。当時の日本の社会経済は、池田所得倍増内閣の登場と相まって、住宅開発手法も戦後復興開発型から大規模ニュータウン開発型への変遷期となっていました。

神奈川県住宅公社も、横浜市磯子区の汐見台を始め、県下に大規模開発のための住宅用地をもとめていて、各市町村もその勢力の拡大伸長のため、企業誘致や住宅地の開発に積極的な時期でした。

昭和38年ごろ　緑ケ丘2丁目 ⇒ 緑ケ丘1丁目　　写真提供：高橋芳夫様

厚木市は、住宅や企業の立地条件に恵まれ、郷土づくりの長期計画においては、東京、横浜の余剰人口の受け皿としての単なるベットタウン的な衛星都市となることを避け、県央の雄都としての自立的な恒星都市を目指していったのです。

自立的な都市を実現するためには、不可欠である産業の振興策として、有力企業の誘致を促進するため、市内に工業団地の造成を推進しました。厚木自動車部品を核として恩名地区に造成された尼寺原工業団地には、既に数社の企業の進出があり、これらの従業員のための住宅確保も大きな課題でした。

昭和38年ごろ　緑ケ丘 1丁目　　写真提供：高橋芳夫様

住宅団地の開発が、進出企業従業員の住宅対策にもなり、さらに定着人口の増加が安定した市の発展につながるという一挙両得の効果があることも、この開発に拍車をかける一因となりました。

当初、開発候補地として、まず二か所が挙げられました。一つ目は尼寺原台地（現在の緑ケ丘と周辺）と愛甲台地（現在の南毛利中学校付近）の二つの台地です。

さまざまな経緯を経て、神奈川県住宅公社は、尼寺原台地を開発地として決定をし、公社、市、地元の協力で地主折衝が進められ、昭和36年10月10日に、地主数約70人、総面積約27ヘクタール（81,000坪）の用地の売買契約が坪単価2,000円で成立しました。

開発区域は、戸室、林、温水のそれぞれ一部にまたがり、小田急線本厚木駅の西北2.5キロメートルに位置する東西500メートル、南北900メートルのゆるやかな傾斜をもつ台地でした。更に、開発区域の南側は工業団地に接しており、東南1キロメートルには国道246号線（当時、現：県道）、東方200メートルに県道清川ー厚木線が走っていました。

開発区域は、一面の畑地でしたから、工事用通路等は、昭和37年4月から着手され、正式な起工式が挙行されたのは昭和37年8月となりました。

土地利用計画

種　別	面　積（㎡）	比　較（%）
宅　地	191,000	70.8
道　路	41,000	15.2
利便施設	27,000	10.0
公園緑地	9,000	3.3
その他	2,000	0.7
計	270,000	100.0

年度別建設計画（建設戸数）

年度	賃貸（戸）	長期分譲（戸）	短期分譲（戸）	産業労働者用（戸）	その他（戸）
36	64		50		
37			101	12	80（県営）
38	400	56	90		226（県営）
39		64	14		96（県営）
40				24	
41					
42				24	
43		40			
45				24	
計	464	160	255	84	402

合計　1,365戸　※産業労働者は650人、2人一戸換算で325戸

道路、上下水道、電気、ガス、宅盤等の都市基盤整備の敷設、建設が終わり、最初の建築に着手したのが短期分譲住宅の木造50戸でした。

当時の厚木市周辺の土地事情は、現在ほどひっ迫した状況ではなかったので、一宅地の広さも平均100坪程度とかなり余裕を持った配置設計であり、その宅地に3DK15坪程度の木造平屋を平均譲渡価格は145万円前後であり、1戸当り60 万円程度の公庫融資が付されていました。

市や神奈川県住宅公社の考えとしては、尼寺原工業団地へ進出する企業の従業員を第一対象者として建築された分譲住宅でしたが、本厚木駅から 2.5キロメートルの台地に位置し、交通の便もままならない地域であるうえに、初回のため知名度も低くかったのですが、建設自体は順調に進み、昭和 38 年の春完成、購入者の募集となりました。

配置図　昭和38年４月　　資料提供：秋山則照様

第1次の募集は、昭和 38 年3月 11 日から 15 日まで (5日間)、募集初日は、おり悪く大雪に見舞われ、公社の担当職員は本厚木駅から徒歩で尺余の積雪をかき分け、募集現地へ出向くような状況であり、当日は1人の見学者もありませんでした。

住宅金融公庫融資（18年月賦払）
木造 分譲住宅
厚木 尼寺団地（第2次）
申込受付　4月22日 ― 4月26日
受付場所
抽せん　4月30日
現地案内　4月20日 ― 22日　3日間
神奈川県住宅公社

募集要領 昭和38年４月
資料提供：秋山則照様

尼寺団地案内図
1、本厚木駅から団地入口までバスで（8分）
2、近く団地内巡回バスの運転を予定しています

募集要領 昭和38年４月
資料提供：秋山則照様

募集期間の5日間は、低知名度、悪天候、見学者の散見と低調でしたが、締切日には募集総戸数50戸に対し、延べ申込み 98人、競争率は1.96倍と一応の成果はありました。

しかし、申込みのない住戸もあり、更に、契約日には辞退者が出るなど、売れ残った住戸の販売については、公社職員が総力を挙げてこれにあたり、全戸完売までには時間を要したようです。

最初はその様な状況でしたが、年次を追って定着人口も増えて、次第に人気も出たことで競争倍率も高くなり、募集・即日完売が続くこととなりました。

短期分譲住宅、長期分譲住宅、公社賃貸住宅、県営賃貸住宅、産業労働者住宅などが次々と建設されましたが、全体で1,700 戸 (独身寮は2人一戸として換算)、約5,000 人の居住する集落であることからただ単に住戸を供給すれば事足りるというものではありません。

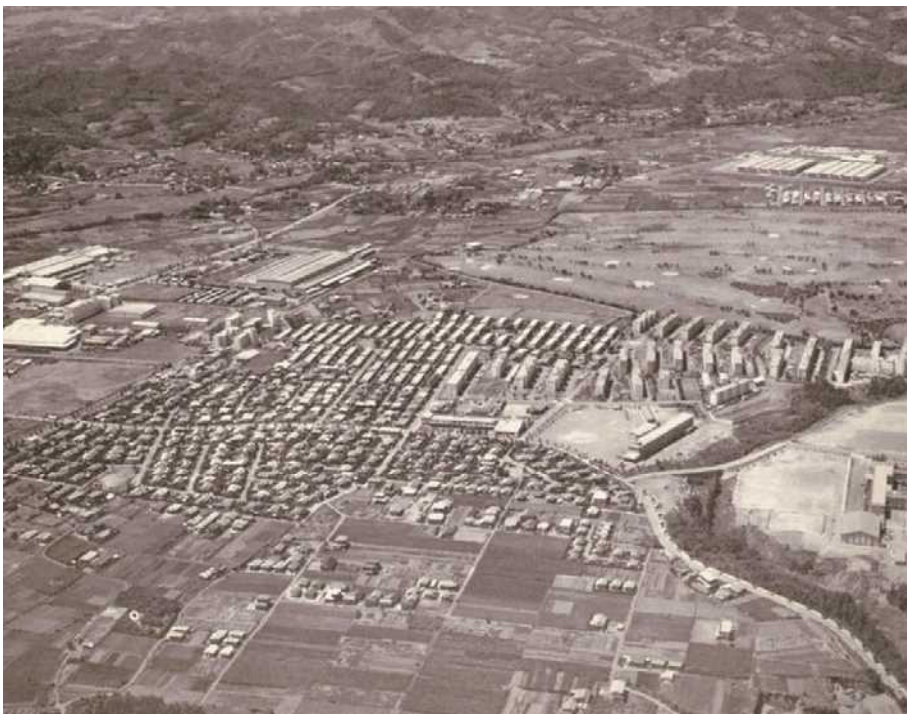
そこには、日常生活を満足させる生活利便施設の提供が必要となります。スーパーマーケットや食料などの生活必需品の専門店(12)、教育機関としての幼稚園や小学校、生活をするうえで必要となる郵便局、交番、公民館、銀行、個人病院 (12)、自治会集会場などです。

これらの施設は、緑ケ丘の成長とともに、市、公社や民間活力によって段々と建設をされたものでした。

この様なまちづくりの中、昭和 45 年に安宅東京スチールセンター(株)の社宅が最後の建物として建設され、着工から完成まで足掛け 10 年を要した一大開発事業も成功裏に終わり、名実ともに、県央の輝けるニュータウン第1号としての緑ケ丘は完成したのでした。

厚木市の第1号ニュータウンへ時代のパイオニアとして入居された方々には、数々のご苦労、ご不便がありました。

第1に、交通機関の問題で、入居と同時に導入が予定されていた循環バスが陸運局の免許の関係で、大幅に遅れたことです。予定よりも、6か月ほど遅れた10月1日からの運行が開始されました。その間は、もっぱら東側にある県道清川ー厚木線を走るバスを利用しました。しかし、これとても、運行本数は少なく、1時間に1、2本程度で大変に不便でした。



昭和42年ごろ

画像提供：神奈川県住宅供給公社

次に、買い物は、第1次入居時に購買施設であるスーパーマーケットや専門店は、入居が間に合わず、バスを利用し、厚木市街まで行きました。

道路は、国道 246 号線から団地入口までの間が、砂利敷き舗装で雨の時はぬかるみ、晴天時には土埃が舞い上がる状態でした。

公共的な施設は、幼稚園、学校、医療機関なども不便ではありましたが、将来の発展への期待と、入居された方々は第二の故郷を得た希望で、これらの不便は帳消しとされたものでありました。

その後、緑ケ丘の開発が起爆剤となり、厚木市では、鳶尾、毛利台、宮の里、森の里などの大規模な開発が、公団、公社、民間などの手で、次々と行われていきました。

（緑ケ丘のあゆみ　抜粋、要約）

バスの乗入れについて

団地バス路線について

昭和37年　尼寺原線開通　料金10円

昭和38年3月　第1次分譲　50戸
現 緑ケ丘1丁目内南北2か所の入居当時のバス路線及びその運行状況
本厚木発　　厚木自動車部品前 (尼寺原線)　　バス賃 20 円
午前　7:35 ～ 8:50(12 本)　　7:45 ～ 9:00(12 本)
午後　16:40 ～ 19:25(11 本)　16:15 ～ 19:40(11 本)
日祭日は朝夕のみ

当時は、団地内のバスの乗入れはなく、厚木自動車部品前か林の停留所まで歩いて行き、バスに乗りました。

バスの団地内乗入れについては、早急に運動するために自治区組織の結成を急ぐとともに、市、バス事業者、神奈川県住宅公社に対し、早期実現を訴えました。

昭和38 年9月12日には、直接、東京陸運局旅客第一課に照会とあわせ、認可促進を要請しました。

※ 東京陸運局旅客第一課 (担当者 中村氏) の回答

(1) 路線認可の件については、昭和 38 年 3 月 1 日神奈川陸運事務所経由で当課へ申請があった

(2) 認可について

a 交通関係は公安委員会

b 道路関係 (市道 2 か所) は厚木市

c 団地内私道は神奈川県住宅公社

以上、3 項目について各関係先の意見を聴取し、それぞれが支障がなければ認可する

(3) 意見聴取の結果

a 公安委員会は 3 月 8 日回答あり－支障なし

b 市道関係－バス事業者が代行持参

c 団地内私道－申請書類提出の際、添付済み

(4) 以上の経過となり、早期決裁を進めているが、2 週間程度を要する

これに対し、自治区としては、甚だ困窮している事情をよく説明し、一日でも早く決裁されることを要請しました。

通学バスについて

緑ケ丘から南毛利小学校までの通学バス路線

当時、緑ケ丘小学校がなく、学区は南毛利小学校であったため、子ども達が南毛利小学校へ通学するためには、七沢線の厚木自動車部品前まで歩かなくてはならず、又バスの時間が始業時間に合わず、南毛利小学校まで徒歩通学をしていました。そこで、通学バスの認可申請を神奈川中央交通厚木営業所に提出しましたが、路線認可の問題もあり、早期運行の実現は困難との回答がありました。

そこで地元選出の安藤覚衆議院議員に同行をお願いし、平塚にある本社へ出向き促進を要請しました。

昭和 39 年1月4付で、同社厚木営業所長から「南毛利小学校学童輸送について」の通知を受けました。

ー要旨ー

3学期末まで下記時刻運行をする

団地発　学校行き　8:30

学校発　団地行き　10:30

学校発　団地行き　12:30(土曜日)

日曜日　運休

なお、学校発14:30 下校時のスクールバスは利用学童が学年別のため分散し利用が低いので、3 学期末まで休止する。新学期からは、入学者数によって運行したい。

通学バスは、厚木市で最初でした。

電話加入について

〇昭和39年3月3日
厚木電話局(高梨次長、峯課長)へ団地に早期電話架設を申入れ
ー回答ー
海老名線の強化工事に9月までかかる。それまでは、電話の増設は不可能である。(厚木局電話回線)団地電話については、自動交換機を検討中。神奈川県住宅公社とも相談する。

〇昭和39年7月2日
団地の電話設置の促進を、再度、申し入れる。

〇昭和39年7月3日
昭和39年7月3日付け、読売新聞に「無人交換機採用で団地に自動電話がひけます」の記事が掲載されていた。この新聞記事を持って局長にただす。7月20日ごろまでに回答することを約束する。

〇昭和39年7月17日
団地電話について、神奈川県住宅公社 建築部から回答
1　団地電話設置については、第1次を尼寺原団地としたが厚木局の設備の余裕がないので予定していない。磯子団地に決めた。磯子局には20,000個の余裕が未だある。磯子団地は、一般電話の申込みの80%が消化されつつある。
(1) 通信部で団地電話を要すると認定した場合、個人電話は架設できなくなること。
(2) 団地電話は団地外売買は許可にならない。
(1)、(2)の条件があるため、磯子団地にとってはむしろ迷惑である。
2　尼寺原団地は第2次の計画となっており、来年度は架設されるであろう。しかし、そのためには、一定数以上(通信部は200戸以上、厚木局は250戸以上)の申込みがあることが前提となる。
3　自動電話装置は、土地は神奈川県住宅公社が提供するが、機械を据え付ける必要があるので400～600万円ほどを要し、割高となる。
仮設費 10,000円　加入費300円
債権70,000円(売却すると85%)
4　尼寺原団地の電話申込みー現在、100本余りである。
分譲住宅完成240戸、追加12戸、分譲アパート40戸が完売。合計300戸、これの70%の200本は加入すると判断する。
なお、一般電話を購入したくても、回線がない以上は許可されない。

〇昭和39年8月9日
　団地電話架設についての説明会

〇昭和39年8月20日
　団地電話申込書締切

〇昭和39年8月22日
　団地電話一括申込書提出200戸　8月24日4戸追加

〇昭和39年8月25日
　団地電話申請書は同日厚木電話局から神奈川通信部へ回送

〇昭和39年12月21日
　団地電話仮設費払込（電話局　団地内公社事務所へ出張）

〇昭和40年1月
　無人電話交換局ー団地内設置（現：緑ケ丘3丁目）

〇昭和40年2月
　団地電話開通

　なお、昭和39年ごろは、尼寺ファーマシーとイリクストア前の公衆電話、神奈川県住宅公社事務所の3か所であったと言うことです。

緑ケ丘地区自治会のおこり

〇昭和38年3月 30 日
　神奈川県住宅公社が第1次分譲として50戸を分譲

〇昭和38年6月8日
　厚木市から「市制に関する座談会の開催について」の案内状が届く

〇昭和38年6月11日
　座談会の開催
　　市窓口業務について
　　公衆衛生について
　　教育施設について
　　交通事情について
　　自治会組織について　ほか
・住民側から日常生活上の要望 (バスの乗入れ、電話加入等) を強力に申入れ
・市側の回答は、「それらの諸問題の要望、申入れについては、早期に地区住民において自治会を結成し、その組織を通して申入れをお願いしたい」とのことであった

〇昭和38年 6月15日
　自治会結成について、世話人から回覧で呼びかける
　ー回覧内容ー
　入居後2か月を経過した方、又入居直後の方さまざまでありますが、近々のうちに全戸にわたって入居される見通しとなりました。
　連絡途上の団地内のことであり諸事情に不便を感じることであると思われます。
　ー中略ー
　しかしながら、ただいまのところバス、衛生、治安、学校問題、防災、その他環境整備等、いずれにおいても未着手ですすめられていないのが現状であります。これらの早期解決の推進が大きな課題であり、急務とするところであります。
　そこで、この推進母体として、自治会組織の結成を早急に進めたく、次のことを提案します。
　(1) 自治会結成区分は、団地内中央道路を境に東地区、西地区に区分し、独立した自治会を設ける。

〇昭和38年6月30日
　この回覧の呼びかけによって、尼寺原団地東部地区自治会 (現 : 緑ケ丘1丁目自治会) と西部地区自治会 (現 : 緑ケ丘２丁目自治会) が結成された。

〇昭和39年2月4日
尼寺原団地の新地名促進について、市へ申し入れる
※ この時、「緑ケ丘」のほかに、「ひばりが丘」の案も出た

〇昭和39年4月11日
団地内各自治会に連合組織を呼びかけた

〇昭和39年7月4日
自治会連絡協議会結成について初会合をもつ

〇昭和39年11月15日
「緑ケ丘地区街区方式説明会」が開催され、市から説明を受ける

〇昭和40年4月1日
新住居表示施行 ― 新町名⇒緑ケ丘1丁目～4丁目
《それまでの町名》
・愛名海道 ― 緑ケ丘1丁目、緑ケ丘2丁目の一部
・吉谷 ― 小学校の一部
・奥原 ― 緑ケ丘3丁目の一部、奥原
・文郷山 ― 緑ケ丘4丁目の一部、王子3丁目
・鳥井戸 ― 緑ケ丘4丁目の一部、緑ケ丘2丁目の一部

このような経緯を経て、自治会組織が結成され、名称も「緑ケ丘」と生まれ変わり、自治会組織を通して日常生活上の問題も徐々に改善され、住みよいまちづくりに大きな役割を果たしてきました。

昭和54年4月1日には、それまでの４自治会に温水奥原、王子2丁目、王子3丁目を加えた7つの連絡協議会となり、現在も地域の生活環境の向上と住みよい地域づくり等をめざし、市と地域の太いパイプ役として地域に貢献していただいています。

緑ケ丘地区にまつわる唄

※この稿は、著者である山本耀暉氏の御厚意で「相模のうた　厚木・愛甲編」から
緑ケ丘地区にまつわる内容をそのまま記載しました。

緑ケ丘音頭

◇緑ケ丘音頭　作詞 / 佐藤邦男　作曲 / 酒井ヤスシ　編曲 / 水谷暢宏

一　ハァー　まるくなろうよ　緑ケ丘で
踊る手ぶりも　花ざかり
空は鮎色　大山が
背のびしながら　眺めてる
ソレ　ポンポン　ポントポント手拍子で
ポンポン　ポントポント　なごやかに
緑ケ丘はごきげんさん

二　ハァー　マッチ箱した　団地だけれど
窓のあかりは　シャンデリア
ここで生まれた　かわいい子
明日の日本を　背おうのさ
(ソレ以下繰り返し)

三　ハァー　夢を愛して　厚木が好きで
住めば故郷の　味がする
九州生まれに　佐渡育ち
通うこころの　街づくり
(ソレ以下繰り返し)

四　ハァー　厚木花火が　夜空に咲いた
団地音頭も　パッと咲いた
みんなしあわせ　総おどり
どれが親だろ　娘だろ
(ソレ以下繰り返し)

昭和37年、厚木市で初めてのモデルタウン緑ケ丘団地が誕生した。1丁目から4丁目まで合わせて1,200戸の住宅団地である。新住民の集まりであるこの団地でも、42年ごろから3丁目などの自治会が主催して「盆踊り大会」が開かれた。

炭坑節や花笠音頭などに合わせて踊りの輪は徐々に広がり、そのうち「団地の音頭があればいいね」という声があちこちで聞かれるようになった。緑ケ丘が誕生して10年目である。

たまたま4丁目に住んでいた大沼優さんが、東芝電子音響に勤めていたことからレコード化の協力が得られることになり、音頭制作の機運が一気に盛り上がった。

46年6月、自治会の正副会長や公民館長（現：公民館地区館長職）、郵便局長らが集まって、「緑ケ丘音頭を作る会」（加藤仲治会長）が結成された。作詞から作曲、歌謡、伴奏、録音、振付けまでの一連の制作工程を、住民参加による自主製作でやろうという遠大な試みである。

作詞は長年、歌謡詩づくりに取り組んでいる4丁目の佐藤邦男さんが担当した。佐藤さんは「団地は新住民の集まりだが、ここで生まれた子どもたちは緑ケ丘がふるさとになる。そのふるさとづくりをしよう」という願いを詩にまとめたという。団地族や新住民の心意気が出ていてなかなか面白い。

作曲は佐藤さんと長年コンビを組んでいる海老名市の酒井ヤスシさん。大衆演劇の大御所沢竜二さんの実家で、酒井さんはほのぼのとした軽快な曲に仕立てた。

歌は当時、2丁目に住んでいたシナリオ作家のジェームス三木さんと広田明美さんがボーカルをつとめ、合唱をコールナナリーのお母さんたちで盛り上げた。当時、三木さんは売出しの脚本家としてマスコミや映画界で活躍していたが、昔歌手として活躍したこともあって歌はお手のもの。広田さんと息のあったところを見せてくれた。

録音は6月27日、緑ケ丘小学校の音楽教室で行われた。当時はちょうど参議院選挙の投票日で慌ただしかったが、和太鼓、電子オルガン、ピアノ、フルート、ギターなどそれぞれが持ち込んだ音響器材の伴奏に合わせてボーカルが歌い、コーラスと手拍子が教室いっぱいになり響いた。最初は練習につぐ練習で、何回かのテストを得て本番録音のOKが出たのは開始4時間後であったという。

とにかく、たった1曲を制作するのにはかり知れない人力と音響器材、そしてチームワークが必要であることを、関係者は身を持って体験させられた。

踊り写真

制作費は「作る会」が地元や企業に寄付を呼びかけてどうにか捻出した。千枚作られたレコードは1枚 200円で販売されたが、たちまち売れ切れたという。その後、林に住む南ヨシエさんに振付けをしてもらい、夏祭りには盛大な「緑ケ丘音頭発表会」が行われた。

「この歌づくりは、力を合わせれば自主製作できるということを身を持って示したところに意義がある」と当時を思い出しながら語る加藤仲治さん。

当時1,200 戸だった世帯も今では 2,600 戸まで増えた。音頭は緑ケ丘住民の歌として子どもからお年寄りまで愛唱されている。

※ 令和3年1月現在ー2,078 世帯

浜辺の歌

一　あした浜辺を　さまよえば
　　昔のことぞ　偲ばるる
　　風の音よ　雲のさまよ
　　寄する波も　貝の色も

二　ゆうべ浜辺を　もとおれば
　　昔の人ぞ　偲ばるる
　　寄する波よ　返す波よ
　　月の色も　星の影も

「荒城の月」「夕焼け小焼け」と共に、日本の三大唱歌の一つと言われている「浜辺の歌」。この歌の作詞者は国文学者で教育者でもあった林古渓（はやしこけい）だが、その古渓が厚木を第二のふるさととして、多感な青少年時代を過ごしたという事実は意外と知られていない。

古渓は本名を林竹次郎と言い、明治8年東京神田に生まれた。父は旧姫路藩士の永田三郎で、明治維新に際して帰農し林姓を名乗った。三郎は教員試験に合格して高座郡羽鳥村 (現 : 藤沢市) に教員として招かれたが、(明治)15年11月、愛甲郡小鮎村の古沢小学校 (現 : 小鮎小学校の分校) に転任、(明治)17年3月に病で没するまで校長をつとめ、生涯をこの地で終えた。

古渓は父が奉職する古沢小学校に入学し、妹たちと共にこの里山のうるわしい風物の中ですこやかに成長していったのである。古渓という雅号は「古い谷間の清流」という意味で、こよなく愛した小鮎の地名と風物から名づけたと言われている。

父の死後、池上本門寺新居日薩聖人に持したが、師の遷化にあい後に寺門を出て、東洋大学の前身である哲学館に学び卒業後、私立京北中学校の教師となる。そのかたわら、東京音楽学校 (現 : 東京藝術大学音楽学部) や東京外語にイタリア語を学び、牛山充、梁田貞、中山晋平らと親交を深めた。その後、松山高校、広島高等師範、愛媛師範などへも出講、昭和3年には立正大学教授、母校の東洋大専門部の講師ともなった。(昭和)22年2月20日、73 歳で生涯を閉じている。

「浜辺の歌」を作詞したのは、古渓が京北中学校で教鞭をとっていた頃で、大正2年親友であった東京音楽学校講師の牛山充が主宰する「音楽」に、「はまべ」として掲載されたものである。

この「はまべ」が学生たちの作曲課題となり、同校師範科に在学、山田耕筰に師事して作曲を学んでいた成田為三の作品が選ばれ、ここに不朽の名作「浜辺の歌」が誕生した。

歌のモデルとなった浜辺は、古渓が厚木に来る3歳から7歳ごろまで藤沢に住んでいたことから、湘南海岸の思い出を歌ったものといわれている。

昭和 44 年には文部省が、中学校学習指導要領音楽編に「浜辺の歌」を共通教材として指定、以後、国民に広く歌われるようになった。

歌碑写真　　撮影協力：神奈川県立厚木東高等学校

古渓はその後、梁田貞、中山晋平、山田耕筰らと組んで作詞活動をつづけ、代表作に「七つ星」やシューベルト作曲「菩提樹」の訳詞「ゆかしの光」などがある。

厚木市王子にある県立厚木東高等学校の校歌は、梁田貞とのコンビで古渓が作詞したものである。校庭には昭和 52 年度卒業生の寄贈で、校歌を刻んだ歌碑が建立されている。

同校には「夕焼け小焼け」の作詞で知られる中村雨紅が、24 年間、教師として在籍しているが、日本の唱歌を代表する二人が厚木東高校を介してつながりがあったという事実は全く奇縁としか言いようがない。古渓と東高校とのかかわりは残念ながら不明だが、昭和11年の同校卒業アルバムには古渓作詞の校歌の楽譜が載っている。当時、古渓は東京音楽学校の教官をしていたという。

厚木市妻田に住む彫刻家・難波孫次郎さん（注：本厚木駅北口広場「若い力」像の作者）は、古渓の甥にあたる。古渓と難波さんの母キワさんが兄妹で、キワさんは兄のことを「文貞さん（古渓の別の号）」と呼んで親っていたという。孫次郎さんが東京美術学校に入る時には保証人にもなってくれた。

「学者、教育者としての真摯さと厳しさを持ち、また人一倍子ぼんのうで、師弟に対しても大変面倒見の良い人であった。厚木に住んでいた当時はまだほんの子どもとはいえ、尼寺ケ原の野道を歩いて作詞に耽ったと聞いています」と難波さん。

そのころ、すでに古渓の頭の中には「浜辺の歌」のイメージが思い描かれていたのかもしれない。

夕焼け小焼け

一　夕焼け小焼けで日が暮れて
　　山のお寺の　鐘がなる
　　お手々つないで　皆帰ろ
　　烏と一緒に　帰りましょう

二　子供が帰った後からは
　　丸い大きな　お月さま
　　小鳥が夢を　見る頃は
　　空にはキラキラ　金の星

平成元年11月4日、NHK総合テレビが放送した「日本の歌・ふるさとの歌」百曲の中で、 童謡「夕焼け小焼け」が三位にランクインされている。

厚木市では、毎夕、防災行政無線を通じて、このメロディーが全市域に鳴りわたる。八王子市や大和市でも同じことをやっているそうだ。

この歌の作詞者である中村雨紅（なかむらうこう）は、昭和47年5月8日、75歳で亡くなるまでの46年間厚木のまちで暮らしていた。雨紅が県立実科高等女学校（ 後に県立厚木高等女学校に改名、現在は県立厚木東高等学校）の国語の教師として厚木に赴任してきたのは昭和元年の12月である。以後、依願退職するまでの24年間、毎日教壇に立った。明朗でユーモアに富んだ教師として、いつも女生徒の間で人気の的であったという。

雨紅は本名を高井宮吉といい、明治30年2月6日、東京府南多摩郡恩方村上恩方（現八王子市上恩方町）の神官の家に生まれた。大正5年青山師範を卒業後、東京にある第二日暮里小学校の教師となる。

全国的な童謡運動がおこったのはちょうどその頃である。大正7年、創作童謡の雑誌「赤い鳥」が発行されて以来、多くの文学者や詩人が童謡づくりにはげんだ。雨紅も雑誌「金の星」に作品を投稿したところ、詩人・野口雨情の認めるところとなり交流が始まった。「雨紅」というペンネームは、雨情の「雨」に染まる、似かようという意味の「紅」をつけたもので、早く雨情のようになりたいという気持ちが込められている。

「夕焼け小焼け」が世に出たのは大正12年である。この詩は後に武蔵野音楽大学の校長となる福井直秋の推薦で、文化楽社から発行された「文化楽譜・新しい童謡その一」に掲載された。神田のピアノ輸入商がピアノを売った時に新作の童謡曲をお客様に無料で進呈したいと福井直秋に相談があったもので、福井直秋から作詞を頼まれた雨紅は「ほうほう螢」と「夕焼け小焼け」の二編を出したという。だが、後になってこの歌がいつ、どこで作詞されたのかは雨紅自身の記憶も定かではなかった。

昭和31年に刊行された『教育音楽』の中で、雨紅は「日暮里小学校の教師をしていた大正8年ごろ、八王子の実家への帰り道に見た日暮れの光景を、幼いころの郷愁も加わって詩になったものと思う」と記している。

雨紅は8月の夏休み、恩方の生家に帰省した際に、日暮六つを知らせる寺の音と、小仏や陣馬の夕焼けの山々へ帰る烏の群れに哀歓を感じて、この詩を作ったのであろう。

作曲は福井直秋を介して知り合った草川信。

草川信は長野県の出身で、彼も川中島周辺の夕焼けと烏の大群に感動してこの歌を作曲したといわれ、二人の呼吸がピッタリと一致、ここに不朽の名作が誕生した。詩と曲がこれほど豊かに結びついたのも珍しく、童謡の傑作とさえ言われている。以後この名曲は全国で歌われ世界音楽全集にも収録、15カ国語に翻訳されている。

厚木市七沢の旅館「元湯玉川館」には、昭和37年9月に建立された「夕焼け小焼けの歌碑」がある。県立厚木高等女学校時代、雨紅の教えを受けた山本茂子さんが、この旅館の女将だったことから、晩年、雨紅夫婦はしばしばこの宿を訪れた。歌碑はその雨紅を偲んで建てられたものである。

碑は高さ1.75m、幅1mの月光石で出来ており、台石は白の花崗岩。碑面には歌碑と上部に烏、下部には松と子どもの絵が刻まれている。いずれも雨紅の揮毫だが、烏の絵は市内林に住む洋画家・杉山勇さんが描いた。裏面には「子孫へ贈る」と題して次の言葉が刻まれている。

＜私は何よりこの詩が好きだ茂子の恩師　中村雨紅先生はこの地をこよなく愛される童心は天使童謡はこころのふる里である 人生には花も嵐もある つらいこと悲しい事があったらこの碑の前に立って静かにうたってごらん 一さいを流してくれるよ 昭和三十七年九月建立 元湯玉川館主 山本鈞二＞

館主の山本鈞二さんは、当時、玉川中学校のPTA会長をつとめており、歌碑には地域の子どもたちの心の成長を願う思いも込められたという。雨紅は、この七沢の夕焼けをこよなく愛した。現在（平成２年12月1日初版発行時）4代目を継ぐ館主の山本淳一さんは次のように話す。

「七沢の観音谷戸が八王子の恩方に似ていて、雨紅先生はたいそう気に入っておられました。時々、自宅から電話があるんですよ。＜ いま夕焼けがきれいだろう ＞って。車でお迎えに行ったこともたびたびありました。恩方の夕焼けをこの七沢の地に見ておられたのでしょうね」

ちなみに、夕焼け小焼けの歌碑は、この厚木の元湯玉川館のほかに出身地である八王子に二つ。作曲者・草川信の出身地である長野県に四つ、そして東京荒川区の第二日暮里小学校校庭にも建てられている。

昭和62年11月28日、日本の童謡を歌い広める目的で、雨紅ゆかりの地である厚木市に「あつぎ童謡の会」が誕生した。会長は足立原茂徳厚木市長で、設立会には教育関係者や婦人団体、文化団体などから 250 人あまりが出席した。そして、翌5月に開かれた「第1回あつぎ童謡のつどい」では、①家族ぐるみで童謡を歌おう②あつぎ童謡の森公園をつくろう③厚木で日本童謡のつどいを開催しよう―など三つの提案を盛り込んだ「童謡のまち厚木」が宣言された。

緑ケ丘にまつわる昔話

名を呼ぶお地蔵様

むかし、むかし、林というところに、民右衛門というおひゃくしょうさんがいました。

ある日、民右衛門がくわをかついで、尼寺原の畑の手入れのかえり、座頭ころがしという坂を下っていると「民右衛門、民右衛門。」と、呼ぶ声が聞こえました。

民右衛門は、歩きながらあたりを見まわしましたが、だれもいません。

「はて、そら耳かな。それとも、きつねか、たぬきかな。いや、こんなまっぴるまにきつねが出るわけがねえしな。気のせえだんべ。」と、ひとり言を言いながら、歩き出した。

「民右衛門、民右衛門。」と、また、呼ぶ声が聞こえました。ふりかえって、あっちこっち見てもだれもいません。

「おら、ぼけちまったかなあ。」と、また歩きだすと、また、後ろの方から呼んできます。声のする方を見たら、草むらの中に地蔵さまが立っていました。

「なんだ、地蔵さまか。いってえ、このわしになんの用かね。」

地蔵さまのまわりには、草木がぼうぼうとはえており、むさ苦しそうでした。

「そうか、そうか。地蔵さまは、こんなむさ苦しい草むらの中よりも、もっと人通りのおおい道ばたにつれてってくれというんだな。よしよし、わかった。」と、くわを道ばたにおいて、地蔵さまをしょって、坂をくだって行きました。

坂の下の道にくると、きゅうに地蔵さまがずっしりと重くなりました。

民右衛門がいくらがんばっても一歩も前へ歩くことができません。

「さては、地蔵さまは、ここがお気にめしたんだろう。ん、ここならおまいりにくる人も、いっぺえいるだろう。」と、民右衛門は、そこに地蔵さまをまつってやりました。

民右衛門の家もほど近いので、毎日、花をそなえ、せんこうをあげて、おまいりをしました。ほかの人々も、通ったおりに、花、せんこう、小石をつんでいくようになりました。

地蔵さまの近くには、庚申塚があり、右横は「南かすや道・北おきの道」とかいてあります。

※ 尼寺原…今の緑ケ丘

（出典：あつぎのむかしむかし・厚木市教育研究所）

尼寺ケ原の大神楽

尼寺ケ原が、広い広い原っぱであった、むかしの話です。

そのころ、尼寺ケ原は、いちめん草ぼうぼうで、大人のひざのあたりまで、草のたけがありました。

この原っぱを、南から北に、一本の道が通っていました。

山の雪がすっかりとけ、桜の花もちってしまったころのことです。

きのうはどしゃぶりの雨でしたが、けさは、からりとはれて、大山がくっきりと見えます。あたりに人家はなく、人かげもありません。

その原っぱの、遠くの遠くの方に、何かひとかたまりで、動いてくるものがありました。

荷車が2台。それを引く馬が2頭。そして、そのまわりに、十何人かの人々。神楽をするひとたちです。

つづみやふえ。おもしろい形のぼうし。

その一行が、塚のちかくにきたときのことです。

ふとみると、塚のところに、あざやかなきものをきた、ひんがよい、美しいおくさまが、おともの女中と立っていました。

神楽のひとたちは、びっくりして荷車をとめ、じっと二人をみつめました。

すると、おくさまは、にこにこわらいながらいいました。

「わたしは神楽をみたくて、みたくて、がまんできませんでした。そこで、おいなりさんに、おねがいをしました。すると、きょう、尼寺ケ原の塚のところにいきなさい。と、いわれました。」

そういって、大判の金貨を十まいとりだして、

「みせてくださいましたら、そのおれいに、さしあげます。」と、いって、座長にわたされました。

一座のひとたちは、小判さえみたことがなかったのです。ですから、

金色にかがやく大判をみたとき、それこそ、気がとおくなるほどびっくりしました。

そして、おおよろこびで、神楽をはじめました。ふえや、つづみの音が、いせいよくひびきはじめました。

三味線の音もいきおいをまし、まりが空たかく、なんどもなんども、ほうりなげられました。

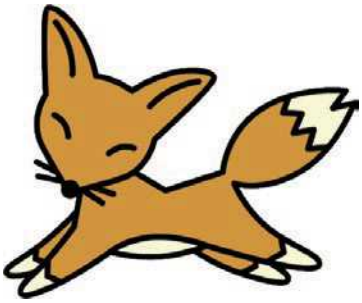
一座のひとたちは、むちゅうになって、神楽をしました。あまりいっしょうけんめいやったので、おひさまが、大山にしずもうとするのが、わからなかったのです。

気がついてみると、みているはずのおくさまと、おともの女中はいず、木の葉が十まいおちていました。

※ 塚…土をたかつもって作ったもの

（出典：あつぎのむかしむかし・厚木市教育研究所）

いたずら狐のお正月



むかし、むかし、今の緑ケ丘や駒ケ原が一面の桑畑や麦畑で、「尼寺原」と呼ばれていたころの話です。

戸室に「狐塚」という小高い塚があって、そこに三九郎という狐が住んでいました。

尼寺原の真ん中には、ひときわ大きな「榎」があって、「おさん」という女狐が住んでいました。

二匹は、とても仲が良く、いつも一緒に通りがかりの人を化かして遊んでいました。宴会帰りのじい様のご馳走を盗んだり、そば畑を川に見せて小僧をだましたり、とんでもない、いたずら狐だったのです。

ある年の暮れのこと、おさんが三九郎に言いました。

「たまにゃあ、人並みの正月をむかえたいね」

三九郎はしばらく考えていたましたが、

「よおし、まかせとけ」

三九郎は、元旦の朝早くおさんを連れて、小金原のじい様の馬小屋に忍び込むと、わらと馬ふんを盗んで、

「さあ、おめえは女衆になれ。おれは男衆にばけるから」

二匹は、木の葉を頭に乗せ、くるりとトンボ返りをして姿を変えました。

そうして、わらと馬ふんを風呂敷に包むと、スタスタと歩き始めました。白山坂を下って恩曽川沿いに、片岸の下の名主さんの屋敷にやってきました。

「ごめんください。飯山から年始まいりに、そばと饅頭をもってきました。」

「そうかい、そうかい、ごくろうだったね。あがって、一服していきなさい」

名主さんのところの正月は豪勢です。村中の人が集まって、ご馳走を食べています。三九郎は、座敷に上がって酒を飲み、おさんは、お勝手で女衆と一緒に雑煮をたべました。

お正月はいいもんだ。木の葉のような魚添えて、油のような酒飲んで、カサより大きな餅を食って。もう、腹っこパンパン。

「さあ、みんな。酒ももちも飽きただろう。そろそろ、飯山の衆がもってきてくれた饅頭で、お茶にでもするか」

それを聞いたおさんは、おおあわて、ところがよっぱらった三九郎は、しっぽを出して眠っています。

「まてぇ、いたずら狐め」

二匹は、命からがら逃げてきました。

「いやあ、たまげた、たまげた」

尼寺原に戻ると、三九郎は苦笑い。おさんは、それを慰めて、
「今度は、あたしにまかせておきな」
飯山の田んぼに走っていくと、一生懸命タニシを集めました。
さて、翌日は正月の二日。厚木の町の大神楽の衆が、小金原や六堂を回ってお祓いをしようと、座頭ころがしを登ってやってきました。ところが、どうしたことだろう、いくら登っても、登っても坂の上へたどり着きません。
「やれやれ、ひどい坂道だ」と思っているうちに、目の前がひらけて大きな屋敷の前に出ると、すうっと門が開き、美しい娘が現れました。
「だんな様がお待ちかねです、どうぞお入りください」
座敷に上がると、床の間に主人が座り、お礼の銭が山と積んでありました。
大神楽の衆は、喜んで荷を解きました。
まずは、めでたい獅子舞と三番叟。剣の舞で、座敷の四方を清めます。続いて、カサに手まりの芸。歌舞伎もあります。ほんとに楽しい正月だ。夢中で舞っているうちに、いつの間にか日がかたむいて、ふと気が付くと、娘も主人もいません。屋敷と思ったのは、大きな榎。銭はタニシのめがねでした。
大神楽の衆は、とぼとぼと坂を下り、千頭の橋を渡っていきました。

それから、しばらくたった、ある日の夕方。大きな榎から狐塚のあたりまで、ほんのり赤い光が、いくつも並びました。
「きっと、おさんが三九郎のところへ嫁入りしたんだよ」
※ タニシのめがね…タニシのふた

（厚木のむかしむかし絵本　第2巻）

緑ケ丘地区年表

年	緑ケ丘地区	厚 木 市
昭和35年		人口 46,131人 12月 市消防常設隊 設置
昭和36年	神奈川県住宅公社が開発計画 10月 用地の売買契約成立	人口 47,761人 3月 工場誘致条例 制定 6月 飯山金剛寺 阿弥陀如来坐像 国有形文化財指定
昭和37年	4月 工事用道路等の工事着工 8月 神奈中バス尼寺原線開通 (アンリツまで) 尼寺原団地造成開始 11月 本厚木カンツリークラブ開業	人口 49,425人 1月 厚木小・相川小学校完全給食開始 4月 内陸工業団地造成工事開始 5月 尼寺原住宅団地造成工事開始 8月 小鮎中学校完成 1月 中央通り防災街区モデル商店街 建築開始
昭和38年	3月 第1次分譲開始 4月 入居開始 (現:緑ケ丘1、3、4丁目) 県営緑ケ丘団地入居開始 6月 尼寺原団地東地区自治会 (現:緑ケ丘1丁目)結成 尼寺原団地西地区自治会 (現:緑ケ丘3、4丁目)結成 10月 神奈中バス緑ケ丘線運行開始	人口 53,444人 3月 尼寺原住宅団地造成一部終了 6月 長谷に衛生プラント完成 7月 尼寺原住宅団地造成完成 市営水泳プール完成 11月 内陸工業団地区画整理開始

昭和39年	2月 新地名促進を市に申入れ （緑ケ丘、ひばりが丘の案もあった） 緑ケ丘駐在所開設 4月 県住宅公社緑ケ丘入居開始 7月 自治会連絡協議会 結成について初会合 10月 中央商店街一部開業 （イリクストアから電気店まで）	人口 53,873人 2月 厚木市民憲章制定 8月 国道 246 号線全面開通 10月 東京オリンピック聖火リレー 厚木市を通過
昭和40年	3月 緑ケ丘地区の区画整理開始 4月 尼寺原団地から緑ケ丘団地へ 地名変更 住居表示施行 ー緑ケ丘1、2、3、4丁目 緑ケ丘1、2、3、4丁目自治会設立 緑ケ丘幼稚園開園 8月 中央商店街 2 次開業 横浜銀行緑ケ丘出張所開設 緑ケ丘小学校竣工式 11月 緑ケ丘郵便局開局	人口 57,637人 3月 小鮎保育所開所 交通安全日制定（毎月1・15日） 6月 東名高速道路厚木IC建設開始 7月 中町、寿町、栄町、元町、 松枝の住居表示実施
昭和41年	緑ケ丘小学校校庭予定地にあった 王子神社の礎石移転 （現：緑ケ丘公民館敷地内へ移転） 4月 緑ケ丘小学校開校 （市内12校目、児童数334人） （開校前は南毛利小学校へ通学） 厚木東高等学校開校 （厚木市寿町から移転）	人口 63,556人 3月 ごみ焼却場完成 5月 昭和橋、もぐり橋開通
昭和42年		人口 67,473人 2月 大雪で交通マヒ 5月 中央通り防災街区モデル商店街完成 6月 河川敷に市営野球場オープン
昭和43 ～48年	林・王子遺跡発掘調査 （縄文中期～弥生終末期）	

昭和43年	10月 緑ケ丘地区大運動会始まる 12月 緑ケ丘小学校増築工事完成	人口 73,315人 4月 東名高速道路 東京・厚木間開通（35㎞） 11月 明治百年記念市民文化祭開催
昭和44年	4月 緑ケ丘児童館開館 温水奥原地区宅地化始まる 8月 緑ケ丘団地祭り始まる （昭和49年8月から「緑ケ丘ふるさと祭り」に名称変更）	人口 78,278人 2月 市の花（さつき）、市の木（もみじ）制定 3月 国道271号線完成（小田原・厚木道路） 愛名老人憩いの家完成（市内初） 4月 公共下水道事業着手 5月 東名高速道路全線開通（345㎞） 7月 ごみ収集を市内全域で実施 8月 新国道129号線開通（通称：厚木バイパス） 9月 林中央地区区画整理開始
昭和45年	足かけ約10年かかった厚木市におけるニュータウン第1号として完成 6月 温水奥原地区自治会設立	人口 82,888人 4月 厚木北公民館新築工事完成 6月 厚木小学校が県立厚木東高校跡地に移転
昭和46年	4月 緑ケ丘公民館開館（市内9館目） 7月 緑ケ丘音頭自主制作（レコード盤作成）	人口 88,609人 4月 厚木南公民館開館 7月 市立図書館オープン 9月 公共下水道供用開始 11月 鳶尾住宅団地造成開始
昭和47年	4月 厚木商業高等学校開校	人口 94,841人 6月 吾妻町住居表示実施 7月 消防新庁舎完成 9月 上荻野まつかげ住宅団地造成工事完了

昭和48年	2月 林地区一部住居表示実施 （王子1、2、3丁目）	人口 100,343人 3月 市道舗装率全市道の1/4突破（26%） 7月 毛利台団地造成開始 10月 厚木流通団地造成工事完了 12月 本厚木駅前防災建築街区 Aブロック完成
昭和49年	4月 県営文郷山団地入居開始 10月 王子3丁目自治会設立	人口 104,736人 7月 戸室小学校用地弥生古墳時代 住居跡発見
昭和50年	3月 緑ケ丘公民館新築 3月 王子2丁目（小田急林団地） 入居始まる	人口 108,955人 2月 市制施行20周年記念式典 8月 戸室小学校開校
昭和51年	4月 王子2丁目自治会設立	人口 113,382人 4月 愛甲小、妻田小学校開校 6月 本厚木駅新駅舎完成
昭和52年	4月 林中学校開校（生徒数693人）	人口 118,964人 2月 毛利台団地住居表示実施 （1～3丁目） 3月 鳶尾住宅団地住居表示実施 （1～5丁目） 4月 国道129号線厚相バイパス開通 10月 本厚木駅北口広場オープン
昭和53年	1月 緑ケ丘児童館どんど焼き始まる 9月 緑ケ丘小学校夜間照明設置	人口 126,903人 3月 小田急線、千代田線相互乗入開始 4月 老人福祉センター開館 11月 厚木市文化会館オープン
昭和54年	3月 王子児童館完成 4月 新たに温水奥原、王子2、3丁 目自治会が加わり、7自治会の 連絡協議会となる	人口 136,652人 1月 中町第一地区市街地再開発開始 南部給食センター完成

昭和55年		人口 145,392人 4月 毛利台小、上荻野小学校開校 6月 森の里地区区画整理開始 8月 全児童館ちびっ子図書館開設 10月 市営玉川球場完成
昭和56年	1月 王子児童館どんど焼き始まる 3月 緑ケ丘老人憩いの家開館	人口 153,086人 2月 中町立体駐車場工事着手 4月 睦合南公民館オープン 国道 246 号線船子バイパス開通 11月 厚木小学校跡地に厚木ガーデンシティビル完成
昭和57年		人口 159,524人 3月 本厚木駅ビル完成 中町第 2-1 地区再開発事業開始 4月 愛甲公民館オープン 森の里に青山学院大学開校 5月 防災行政無線開局 7月 地域文化の創造と発展を考える会各地区に発足 12月 婦人会館・保健センターオープン
昭和58年	11月 さくら公園開設	人口 165,349人 1月 市営旭町自転車駐車場オープン 4月 厚木北、上依知児童館オープン
昭和59年		人口 170,105人 1月 38 年ぶりの大雪 4月 飯山小、藤塚中学校開校 生きがいセンターオープン 10月 地下道、バスセンター完成 1月 市制施行 30 周年記念県央厚木駅伝開催

昭和60年		人口 175,600人 2月 厚木シティプラザ全館オープン (仮称)厚木市環境センター建設着手 4月 森の里小学校開校(児童数75人) 厚木サンパークオープン 5月 市制30周年記念事業実施 秋田県横手市友好都市締結 9月 防災訓練実施(66か所) 10月 若宮公園オープン
昭和61年		人口 180,150人 3月 郵政省テレトピア構想モデル都市指定 森の里住居表示実施(2・3丁目) 4月 森の里中学校開校(生徒数186人) 5月 飯山白山森林公園完成 7月 中央通り(旧246号線)モニュメント 9月 六都県市合同防災訓練実施(首相参加) 公共下水道普及率 50% 才戸橋掛替工事完成
昭和62年		人口 184,829人 3月 上依知老人憩いの家完成 4月 依知小学校開校(児童数576人) 旅券事務所厚木支所オープン 6月 七沢自然教室オープン 10月 愛甲石田北口整備事業完成 11月 市内11連絡所 開設 ファクシミリサービス開始 環境センター完成

昭和63年		人口 188,734人 2月 市民朝市 200 回 3月 船子、酒井老人憩いの家完成 4月 戸田小 (児童数555人)、 睦合東中学校 (生徒数1,026人)開校 8月 厚木中央公園地下駐車場工事着手 9月 荻野神社イチョウ市天然記念物指定 10月 山際老人憩いの家完成 11月 総合福祉センター建設工事着手
平成元年		人口 192,493人 4月 厚木市シルバー人材センター発足 厚木市が業務核都市に位置付け 10月 荻野運動公園競技場、テニスコート オープン 11月 林地区区画整理事業開始 12月 藤塚、温水、長谷老人憩いの家完成
平成2年	4月 神奈中バス王子線新設	人口 197,283人 4月 相川公民館・相川保育所新築移転 7月 厚木一番街モール完成 (340m) 11月 総合福祉センターオープン 寿町三丁目再開発事業開始 12月 高坪区画整理事業開始
平成3年	9月 緑ケ丘幼稚園新設 (建替)	人口 200,673人 1月 中町2丁目B地区再開発事業開始 4月 消防睦合分署業務開始 5月 サンデッキ完成 (137m) 7月 及川児童館・老人憩いの家オープン 鳶尾児童館・老人憩いの家オープン 9月 台風18号市制施行以来最大被害

平成４年		人口 203,775人 ３月 国道412号線バイパス一部開通 戸室老人憩いの家完成 ４月 新座架依橋開通 中町地下道延伸部分開通 ９月 学校週5日制スタート 10月 小鮎公民館新築移転
平成５年	６月 緑ケ丘地区3世代交流事業開始	人口 206,186人 ４月 相川小学校、岡田へ移転 荻野運動公園野草園オープン ５月 七沢自然教室・童謡の丘完成 10月 粗大ごみ有料化
平成６年		人口 207,146人 ５月 東町スポーツセンターオープン ７月 山際児童館・山際南部老人憩いの家 オープン 11月 依知北公民館オープン
平成７年	12月 緑ケ丘公民館・緑ケ丘児童館 新設（建替）	人口 208,627人 ２月 厚木市制 40 周年
平成８年		人口 210,008人 ２月 あゆみ橋完成 ３月 国道 412 号バイパス全線開通 ５月 玉川公民館新築移転オープン 11月 南毛利公民館新築移転オープン
平成９年		人口 212,407人 ４月 厚木中央公園全面オープン ５月 市営及川球技場オープン 11月 市営南毛利テニスコートオープン
平成10年	11月 緑ケ丘5丁目（温水、奥原、飯山 の各一部）に町名変更	人口 214,674人 ６月 旧岸邸寄贈 10月 かながわ・ゆめ国体秋季大会開催
平成11年		人口 215,785人 ４月 森の里公民館・児童館オープン 地区市民センター設置

平成12年		人口 217,369人 4月 ぼうさいの丘公園オープン 11月 北消防署落成
平成13年		人口 217,848人 1月 21世紀スタート 9月 厚木商工会議所新開館オープン 12月 特例市の指定
平成14年		人口 219,907人 4月 特例市としてスタート 12月 年末年始市営スポーツ施設無料開放
平成15年		人口 220,665人 4月 厚木市立病院一部オープン 10月 まちづくり条例施行
平成16年		人口 221,471人 4月 教育改革プランスタート 5月 都市再生緊急整備地域指定 6月 地域再生計画認定 12月 県内初青色回転灯装着車導入
平成17年		人口 222,703人 1月 企業等の誘致に関する条例施行 2月 厚木市制50周年記念式典 6月 AED公共施設設置
平成18年		人口 222,712人 4月 南毛利スポーツセンターオープン
平成19年		人口 223,847人 3月 森林セラピー基地に認定 4月 中学校給食スタート 7月 にぎわい処・番屋オープン
平成20年		人口 225,163人 8月 北京五輪女子ソフトボール金メダル
平成21年		人口 226,651人 4月 新総合計画スタート 睦合西公民館オープン

平成22年		人口 225,797人 4月 荻野公民館新築移転オープン 9月 関東初B−1 グランプリ開催 11月 セーフコミュニティ認証取得 12月 自治基本条例施行
平成23年		人口 224,327人 3月11日 東日本大震災・厚木市震度5弱 4月 各種イベント、行事が延期、中止 7月 地上デジタル放送移行
平成24年		人口 224,330人 1月 暴力団排除条例施行 4月 市民参加条例施行 10月 市民協働推進条例施行 セーフコミュニティ推進条例施行
平成25年	3月 緑ケ丘小学校エコスクール認定 8月 緑ケ丘小学校こども自転車 神奈川県大会準優勝	人口 224,924人 3月 圏央厚木インターチェンジ開通
平成26年	6月 緑ケ丘小学校入口バス停前の 商店街解体工事 昭和天皇御在位50周年記念の クスノキは残る	人口 225,020人 2月 日経グローバル・経営革新度 812市区中1位 アミューあつぎオープン
平成27年	6月 大きな駐車スペースを持った コンビニとドラッグストアオープン	人口 225,133人 2月 厚木市制60周年記念式典 8月 ビックレスキューかながわ実施 11月 セーフコミュニティ再認証(2回目)
平成28年		人口 225,661人 4月 消防広域化・清川分署オープン 9月 いきものがかり凱旋ライブ・5万人
平成29年		人口 225,524人 3月 保健福祉センターオープン 4月 厚木南公民館新築移転オープン 7月 災害用ドローン運用開始 12月 厚木市立病院全面オープン

平成30年		人口 225,812人 8月 沖縄県糸満市と友好都市締結 12月 日経DUAL・共働き子育て しやすい街ランキング全国3位
平成31年 令和元年		人口 225,247人 1月 あつぎ郷土博物館オープン 4月 消防本部に拠点機能形成車配備 高度救助隊発足 5月 新年号「令和」 12月 中国武漢で新型コロナウイルス 関連肺炎が複数報告
令和2年		人口 224,536人 新型コロナウイルス感染拡大防止 のため緊急事態宣言発出
令和3年	2月 文部科学大臣から 全国優良公民館表彰	人口 223,710人 7月セーフコミュニティ再認証(3回目)

厚木市の公民館の生いたち

そもそも、なぜ各地区に公民館が設置されたのか…。

それは、昭和30年(1955年)2月1日の町村合併による市制施行にあたって、必要最低限の体裁を整えるための条例を定める必要があり、

・市役所の位置を定めること（旧 厚木町役場）
・福祉に関する事務所の設置に関すること
・旧 町村の役場を市立公民館とすること

などが専決処分によって決定されたとのことです。

この旧 町村役場を公民館にすることの経緯は、今となっては知る由もありませんが、この時に、8館が設置されたことは、以後の市民の皆様の活動、市民協働をおこなう拠点として大きな役割を果たしてきました。

また、旧1町7村の町村名を現在に残すこととなった要因の一つになったのではないかと言う見方をされる方もおられます。

そして、市の発展、地域の人々の人口増加に伴って、現在では、15館1分館の16館となっています。

平成11年には、市役所の窓口業務のうち、市民の皆様が必要として出向くことが多い、住民票、戸籍、税証明などの諸証明をお住いの近くで受け取れるようにする事務や自治会会長を通して市民の皆様のご要望などを取り次ぐ「地区市民センター」を併設し、市民サービスの向上を図り、今日に至っています。

歴代緑ケ丘公民館地区館長

氏 名	所 在	就 任	退 任
小出　逸史	緑ケ丘1丁目	S46.4.1	S48.3.31
山田 秋太郎	緑ケ丘2丁目	S48.4.1	S54.3.31
山田 茂一	緑ケ丘2丁目	S54.4.1	S61.3.31
石原 米祐	緑ケ丘2丁目	S61.4.1	H4.3.31
吉田 信子	緑ケ丘1丁目	H4.4.1	H12.3.31
田邊 文子	緑ケ丘1丁目	H12.4.1	H14.3.31
高橋 毅	緑ケ丘2丁目	H14.4.1	H20.3.31
遠田 信一	奥原地区	H20.4.1	H26.3.31
古長 重幸	奥原地区	H26.4.1	H30.3.31
佐々木 安雄	王子2丁目	H30.4.1	

緑ケ丘公民館開館50周年記念事業実行委員会 名簿

役　職	氏　名	所属団体名等	総務部会	式典・表彰部会	記念誌発行部会
実行委員長	佐々木 安雄	公民館地区館長	★	●	◆
副実行委員長	笹山 惠一郎	地域づくり推進委員会委員長 自治会連絡協議会会長 緑ケ丘2丁目自治会長	★	●	◆
副実行委員長	近藤 操可	公民館運営委員会委員長	★	●	◆
総務部会長	関口 藤緒	青少年健全育成会会長	★		
総務副部会長	千葉 俊司	緑ケ丘4丁目自治会長	★		
総務部会員 監　事	佐藤 文則	交通安全指導員協議会 緑ケ丘支部長	★		
式典・表彰部会長	友野 利雄	王子3丁目自治会長		●	
式典・表彰副部会長	宗藤 崇	民生･児童委員協議会会長		●	
式典･表彰部会員	新町 真澄	緑ケ丘3丁目自治会長		●	
式典･表彰部会員 令和2年度	菅 正清	体育振興会会長		●	
式典･表彰部会員 令和3年度	齋藤 隆夫			●	
式典･表彰部会員 令和2年度	竹中 里香	交通安全母の会会長		●	
式典･表彰部会員 令和3年度	佐々木 景子			●	
記念誌発行部会長	竹内 正德	王子2丁目自治会長 文化振興会会長			◆
記念誌発行副部会長	池田 正	地域福祉推進委員会委員長			◆
記念誌発行部会員 令和2年度	苅辺 貴史	緑ケ丘1丁目自治会長			◆
記念誌発行部会員 令和3年度	小路 孝志				◆
令和2年度 監　事	藤田 國光	奥原地区自治会長			◆
令和3年度 監　事	成川 三八子				◆

編集後記

まず、初めに、この記念誌を発行するのに当たりましては、多くの方々に資料、写真やアドバイスをいただきましたことを、この稿をおかりして厚くお礼申し上げます。

本当に、ありがとうございました。

この記念誌を、何年後、何十年後かにご覧になった方は、マスクをされた方々の写真が掲載されていることを不思議に思われることでしょう。

人々は、令和元年 (2019 年)11月ごろから全世界に感染者が拡大した新型コロナウイルスの恐怖に脅え、政府からは、度重なる緊急事態宣言の下、飲食業の営業自粛を始め、イベントへの人数制限、テレワークなどの在宅勤務が推奨されるなど、公民館事業やサークル活動もできなくなりました。記念誌編集時の令和3年(2021年)では、一年先延ばしとなった東京オリンピック・パラリンピックが開催されてはおりますが、第5波の真っただ中で、一日の感染者数は全国で2万5千人を超えています。

そのような状況の中、令和3年2月には、これまでの公民館活動が評価され、文部科学大臣から優良公民館として表彰されたことは、緑ケ丘公民館開館50周年に花を添えたものでした。

今後も、人と人との絆をさらに強固なものとし、この緑ケ丘をふるさととして誇れるよう50周年を記念して募集したキャッチフレーズ「笑い声 集う人の和 緑ケ丘」の推進に地域一丸となって取り組んでまいります。

皆様が、生涯現役でいきいきと笑顔があふれる日常をおくることがでるようにご祈念申し上げます。

緑ケ丘公民館開館50周年記念事業実行委員会
記念誌発行部会長　竹内 正德

【緑ケ丘公民館開館50周年記念誌】
発行日 / 令和3年(2021年)11月　第1刷発行
発行者 / 緑ケ丘公民館開館 50 周年記念事業実行委員会
企画・編集 / 記念誌発行部会